

極楽寺本堂の変遷

極楽寺の本尊千手観音像は鑑定の結果、平安後期の作と判明しましたから、平安後期ごろ、ここに観音の霊場としての寺院があったことはたしかです。

この極楽寺の位置は不思議と巖島弥山の頂上・巖島神社・地御前神社の真北になります。偶然と言えばそれまでですが、当時は後白河法皇が、本地仏の一つを千手観音とする熊野三山へ、京都から大勢の伴を引きつれ、33回も参詣するというような風潮の世ですし、巖島神社は後白河法皇と密接な関係のある平清盛により隆盛になったのですから、巖島神社と何らかの関係があったのかもしれない。

この後の極楽寺の様子は明らかではありませんが、諸控に「文治三年後鳥羽院御願依り佐藤則清再建天文10年4月焼失永禄5年8月毛利元就朝臣御再建」とありますから、これを信じるとすると、平安後期ごろに出来た建物が破損し再建されたこととなります。

次に、この建物が天文10年(1541)に焼失したとすると、文治3年(1187)からは354年となり、その間同じ建物であったか、どうかは判断に苦しむところです。

一方、極楽寺には広島県の重文に指定された明応2年(1493)の鰐口があり、口経が45センチあり、当時、相当に大きな御堂のあったことは確実です。また、極楽寺の延宝六年の鐘の鐘銘に、明応の前のころ、寺に鐘があったが、あるとき賊に盗まれ、久しく鐘声絶えていたが、明応5年(1496)、巖島神主家の藤原宗親を大壇那として鐘が再鑄されたことが述べてありますから、当時、鐘桜も備わった寺院のあったことがわかり、それに巖島神主家が関わっていたことがわかります。

しかし、文治から明応を考えても、約307年たっていますから、創建の建物ではなく、明応ごろには巖島神主家を大壇那として再建された建物があったのかもしれない。

この建物は前述のように天文10年(1541)に焼失し再建は永禄5年(1562)ですから、その間に21年の空白があります。千手観音に相当の傷みのあるのもその間のことかもしれません。

この建物は広島県の重文に指定されていますが、すでに424年を経ていますから、その間にたびたびの修理を経て、現在に到っています。たとえば、屋根の頂にある宝珠の露盤には、慶長4年(1599)の修理の銘文がありますが、それによると、宍戸備前守元統が大壇那だったことがわかります。元統は毛利家の族将で、甲立の五竜城主ですが、五日市の光明寺城をも守り、海老山の北麓に宅所がありました。彼は文禄元年から慶長3年にわたる朝鮮出兵の二度の戦役に参加しましたから、この慶長4年の極楽寺への奉寄進は彼の帰還後の心境を物語るものだと思います。

江戸時代に入り、宝永元年、天明8年、寛政2年、文政3年などに修理の記録があります。それぞれの時代の有志の尽力によって、極楽寺の本堂は守られてきたのです。



極楽寺本堂 (古式を伝える禅宗様式殿である (県重文))